

「国際湿地再生シンポジウム2006 湿地の保全再生と賢明な利活用」参加報告

研究第一部 主任研究員 瀧 健太郎



1. はじめに

平成18年1月28日から29日かけて、滋賀県大津市にて、「国際湿地再生シンポジウム2006 湿地の保全再生と賢明な利活用」が開催されました。財団法人リバーフロント整備センターは、主催団体である「国際湿地再生シンポジウム2006実行委員会」の構成員として、企画段階から参加しました。また、当日の分科会においては、当センターで研究を進めている「ウトナイ湖の保全・再生計画」に関する報告を行ないました。本稿では、このシンポジウムの開催概要について報告します。

2. 開催趣旨（案内パンフレット記載文を一部修正）

湿地は、生物多様性に富み、生物の命を支えるとともに、食糧供給、水質浄化、洪水調節、レクリエーションや精神的な潤い・癒しの機能などによりわたしたちの生存を支え、さらには生活の豊かさをもたらしてくれています。

湿地は、近年まで価値のない土地と見なされることが多く、干拓や埋め立てで次々と失われ、世界的にこの50年間で約70%が失われたと言われていています。地球規模で消失しつつある湿地の保全を目的にはじまり、琵琶湖も登録湿地となっているラムサール条約も、湿地全体の多面的機能に着目し、湿地再生の生態系と生物多様性を保護し、賢明な利用を促す制度として展開してきました。湿地の保全と再生は、自然との共生に向けた取り組みの象徴であり、重要な課題となっています。

このような状況を踏まえ、これまでの湿地の保全に関する国内外の先進事例から得られた知見を集約するとともに、これからの取組のあり方について検討し、湿地再生に向けた理解と取組を一層進めることを目的に、本シンポジウムは開催されました。

3. 開催概要

シンポジウムでは、第1日目(28日)には先進的な取り組みに携わってこられた関係者による基調講演、第2日目(29日)にはテーマ別の分科会でのディスカッションが行なわれました。他にも会場内では、全国の様々な取り組みのパネルやヨシを使った民芸品の展示などがなされ、それぞれのパネルや展示の前でも活発な意見交換が行なわれていました。また、基調講演の前には、希望者によるエクスカージョンが企画され、琵琶湖周辺での湿地再生の取り組みの様子を視察しました。

○期日：平成18年1月28日(土)～1月29日(日)

○会場：大津プリンスホテル（滋賀県大津市）

○主催：国際湿地再生シンポジウム2006実行委員会
(会長：國松善次 滋賀県知事)

○基調講演：

中村玲子（ラムサールセンター事務局長）

中貝宗治（兵庫県豊岡市長）

ウィリアム・ミッチ（オハイオ州立大学教授）

○分科会（事例報告とディスカッション）

第1分科会：生物多様性と湿地の再生

座長：角野康郎（神戸大学理学部教授）

第2分科会：多様で重層的な湿地の利用と再生

座長：牧野厚史（滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員）

第3分科会：湿地の再生と利害調整

座長：磯崎博司（明治学院大学法学部教授）

第4分科会：湿地再生のための計画と技術

座長：森本幸裕（京都大学大学院地球環境学堂教授）

子ども湿地交流会

座長：川嶋宗継（滋賀大学教育学部教授）

○関連プログラム（エクスカージョン）

早崎内湖再生と琵琶湖保全の状況の視察（28日）



早崎内湖試験湛水の様子



会場内の展示（ヨシ製品）

4. 湿地再生琵琶湖宣言

分科会終了後には、全体会議（座長：川那部浩哉（滋賀県立琵琶湖博物館長））が開かれ、各座長が分科会での議論の内容が報告され、活発な議論の末、全会一致で「湿地再生琵琶湖宣言」が採択されました。

5. おわりに

かつての日本は、「豊草原の中つ国」と呼ばれていました。まさに湿地の国だったのでしょう。これまでの発展の代償としてこれらの湿地の多くが失われましたが、近年、その価値が広く認められ、湿地を保全再生する取り組みが活発に進められるようになっていきます。

今回このシンポジウムを通じ、湿地再生に取り組んでいる多くの関係者が互いに勇気付けられていく様子を目のあたりにすることができました。「湖国」滋賀県で開催されたこのシンポジウムをきっかけに、各地の湿地再生に向けた取り組みがより一層力強く進められる期待が膨らみます。